



読者へのお願ひ

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたのお友だちやお近くの方々に「読後の感さい。それといっしょに」読んで感想を、左記あてに送っていただけましたら、ありがたく存じます。なお、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思ひますので、もしもお気づきの点がありましたら、あわせて教えてください。おかげさまで、カッパ・ブックスのどの本も版を重ねるごとに、誤植が一つ一つ少なくなっております。お手紙には、職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社出版局

神吉晴夫

大学の青春・駒場

昭和31年5月5日 初版発行

¥ 130

著者 山 下 肇

発行者 神 吉 晴 夫

印刷者 山 元 正 宜

東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光 文 社
振替 東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

〔美行製本〕

表紙の模様・意匠登録 116613

大学の青春・駒場

山下

肇著



商標登録 467067

まえがき

戦後十年、新しい日本の青春の痛みのなかから、この本は生まれた。ぼくがそれを書いたのではない。それが、ぼくに書かせたのだ。書かすにはいられなくさせたのだ。

何をおいても、いまこれを書かなければいけない。今こそ書かなければ、とぼくは思った。はじめに光文社の神吉晴夫氏が言った。

「教師である著者と教え子の大学生たちとが一つになって息づいているような、学生の体臭がプンプン読者に伝わるような、生きた生活記録、いや、ライフ・ストーリーにしてください。」と。——それは、ぼくの望むところだった。

「いや、ぼくが書いたら、そういうものにしかなりませんよ。そういうかたちでしか書けませんもの。」と、ぼくは答えた。もちろん、力のかぎり書いてみようかと、決心してである。

「わたつみ」の世代の一人として戦争から帰ってきたぼくは、この十年の心の歴史を、終始、現場の教師として、学生の生活とともに形成してきた。貧しいぼくに何ができたろうか。逆に若い友だちこそ、ぼくに無限に多くのものをあたえてくれた。

戦後日本の現実をもっともよく教えてくれたのは、かれら青年たちである。そこから、ぼくは

日本の未来の希望をまなんだ。ぼくの大学院はといえば、軍隊だった。そこで骨身に徹して学びとってきたものを、この日本の未来の希望と結びつけ、ぼくもまたその若い希望と一つにつながっていくこと、これ以外にぼくの教師として生きるべき道はなかった。ぼくは、かつて、東京大学新聞に、戦後十年の日本の『忘れ得ぬ青年たち』を書きつつ、それがこの本の原型になった。しかし、この本はすでにその原型をほとんどとめていない。なぜなら、これはけっして追憶ではない。今日の学生、明日の青春を、ともに語る期待の書であるべきだからである。

ぼくは、ぼくが戦後、最初に教えた浦和高校生（旧制）の昭和二十二年四月十日の日記を忘れない。それは、その日の夜あけ、四人の高校生が下駄をぬいではだしになり、白線帽に黒マントをひるがえして、神田の街を走っていく姿なのだ。かれらは、その朝、岩波書店で売りだす『野呂栄太郎全集』第一巻（『日本資本主義発達史』）を買うために、店頭へ行列しようと突進している。かれらは、日本の青春を自分の青春として、まだ寒い早朝の焼けあとの道を、はだして「真理」をもとめて駆ける……。

しかし、今日、衣食住と「真理」の関係は、はなはだしく変化した。「真理」をもとめるよりは電気洗濯機を買い、新聞を読むよりは携帯用ラジオに聞きほれ、投機心ばかり働かす大学生。

ぼくは、この本を書きたす直前に、H・ファストの新作『平凡な教師、サイラス・ティンバマン』を読んだ。そこに今日のアメリカの大学生を見たぼくは、商業主義的愚民政策が、日本の学

生たちまでむしばみはじめているのを痛感した。

「戦後十年の繁榮に満ちたりている家庭の子女、欠乏も恐怖も死も知らず、この国の歴史のどの時代にも見られなかったほど立派立つぱな身なりをし、どこの子どもたちもおよばないほどの配慮と榮養を受けて育った、強健で、背の高い、美しい青年ばかりの世代。」

今日、「なんの抵抗ていこうも感じない」と公言してはばからない美しい青年は、戦争なんてどこ吹く風と、「すでにあたえられていた自由」を何不足なく享樂しながら、実利的・視覚的な実物教育をふんだんに受けているうちに、「真理」への飢えを知らず、「考える」抽象能力を育てないでしまった人たちだろう。かれらには、自分のことしか見えない。自分の行動を自分の本能と私利私欲でしかはかれない。かつての「理性と情熱」は、みせかけの「良識りょうしきとエスプリ」に変わり、「勉強」といえば、虚榮で飾りつける「話の泉」的教養主義になっている。

今年のはじめに、ぼくは東京大学新聞に、『東大生への苦言』を書いた。

「最近の東大生はどうかしてはいはしないか、……八〇点とれる成績を九〇点、九五点とろうとする時間とエネルギーがあるのなら、その貴重な若さを、今後三十年、五十年の日本の重責じゅうせきに堪えるための、もっと大切な問題にふりむけて、実力を養ってくれ。……日本が世界の孤児こじになって見すてられるときは、君たちが日本の民衆から見すてられるときなのだ……」と。

入試合格第一主義を、そのまま「成績と就職」第一主義にきりかえるのが大学生生活なら、それ

は学生を商品化することではない。幼児を「豆スター」に売りこもうと躍起になる母親となんの変わりがある。『死の商人』はこのときとばかり、買いしめをやるにちがいない。

いま世界は、ふたたび大きな歴史のまがりかどにきて、平和と民族の独立が真の人類の繁栄の道であることをはっきり示している。それなのに、日本の国内だけは、一握りの政治家と資本家が、私利私欲の舵をにぎって、世界とまったく逆行する方向に、ぼくたちの日本をさらっていかうとしている。この方向に日本の青年がだまって無批判に従属していくならば、それは青年の繁栄どころか破滅の道でしかないであろう。

憲法の危機と教育の危機は、こんにち同時に外から襲いかかってきている。それは今日の大学生活の内側からの危機、学生の商品化と、じつは一つのものである。すでに小・中・高の「社会科」教科書改訂の原案では、「戦争放棄」の四字が、全教材から抹殺されているという。このきびしい死の現実を生之歌ごえに変えていくには、骨ぬきの「教養主義」では役にたたない。

ならば、大学生活から何をつかまねばならないのか。青春に燃やすべきものは何なのか。それをほくは、駒場の新しい大学で、学生とともに歩んだ七年の歩みのなかから、ありのままに、具體的な問題として、今こそ示さねばならないと考えたのである。

昭和三十一年四月

目 次

まえがき……………三

1 新しい大学の出発……………二

おろされた「一高」の門標……………二

緊張した学園の空気が……………二七

象牙の塔の圧迫感……………二四

「角帽革命家」たち……………二九

試験ボイコット始まる……………三三

2 駒場の門の内と外……………四〇

「友よ肩をくめ……………四〇

向かい合うピケと警官隊……………四七

受験派もボイコット派も……………五六

教授会と学生大会……………六四

3 学園と社会……………七一

銀杏並木の下で	一七
駒場祭の南原さん	七六
最後の旧制大学生	八四
死を選んだ学生	九二
七月の朝の悲劇	九二
駒場から本郷へ	九八
父の愛と悲しみ	一〇三
教えるものと学ぶもの	一〇八
教師と学生のミソ	一〇八
帰郷運動——心のふるさとへ	一一四
民衆との新しいつながり	一二〇
6 苦悶する青春	一二七
ゆきづまった学生運動	一三〇
静かになった学園	一三一
ある女子学生の死	一三六

	孤立するコミュニスト学生	一四二
7	遠藤さんを死なしたもの	一四九
	「胸いっぱい あなたの愛を！」	一四九
	背負いきれない問題の重み	一五五
	愛と思想の十字路で	一五八
	地下にもぐった学生の母	一六四
8	中国人学生 陳君	一七〇
	「ぼくは平和の学問を学ぶ！」	一七〇
	二つの民族の友情と恋愛	一七六
9	大学生活——今日の問題	一八六
	「期待」と「幻滅」	一八六
	成績ノイローゼ	一九一
	失われていく自主性	一九九
10	大学の青春のあしおと	二〇三
あとがき		二〇〇

1 新しい大学の出発

おろされた「一高」の門標

駒場の正門に「第一高等学校」の門標とならんで、「東京大学教養学部」の新しい門標がもう一つかけられたのは、昭和二十四年の初夏のことだ。しかし、翌春になって一、二年がそろい、教官も全員が専任になって、はじめて教養学部はかたちをととのえた。旧「一高」はそれと同時に姿を消した。

しかし、「一高」の門標はおろされても、正門の鉄格子にかたどられた柏葉の徽章はいつまでものこっている。そして、その柏葉を背にして、その二十五年の秋に、「新制東大」の学生たちはスクラムを組み、ピケットラインを幾重にもはった。

かれらの高唱する歌は、もう寮歌ではない。「国際学連の歌」であり、「インターナショナル」だった。警官隊の棍棒がその歌ごえに打ってかかり、ピケットラインを突破しようとしたとき、シンマイ助教授のぼくは、夢中で、そのあいだに飛びこんでしまった。

その年の秋のはげしい学生運動の高まりは、いっばんに学生のあいだでは「十月闘争」と呼ばれている「赤い教授追放反対」の運動だった。駒場ではそれが、九月末の「試験ボイコット」事件となって激化した。

今にしておもえば、これこそ、新しい大学生活創造のために、駒場の学園がどうしてもくぐらねばならなかった、大きな歴史の波頭であつたらう。ぼくの十年の教師生活で、なんといつてもこの事件ほど大きなものはなかった。

この事件をさかいにして、過去の高校的なものは、いっさいどこかへ吹っとんでしまった。学園には、まったく新しい展望がひらけたのだった。「ポリ」（警官）と学生たちの「ピケ」のあいだで、もみくしゃになったぼくは、いよいよ自分がいやおうなしに第一線に立ったことを痛切に感じとらないわけにはいかなかった。学生たちは、そのとき、歴史の最前衛に立っていた。そのことがぼくに、この痛切な自覚をあたえたのだったろう。

「新制東大」の学生たちは、まだ大部分が旧制高校のメシを食ってきた連中だった。全国から集まってきたその数は、旧一高とは比較にならない四千の大世帯で、寮と教室は一つ学園のなかで一丸となり、学生の隊伍と歌ごえが学内を圧し、全員蜂起の観を呈した。

その数日間、学校の機能は半ば停止し、時計塔には反戦旗がひるがえった。スピーカーから学生の声が「全・新・東（全・新・制・東・大）の学生諸君！」と呼びかける。その声は本郷の東大生だろうか、

それとも「全学連」(全国学生自活会連合)の指導者だったのだろうか。学生運動の中心は、もはや本郷から駒場に移った観があった。

「なんだい、株の銘柄みたいな呼びかたするない。」と、ぼくはつぶやいた。

それまで旧制高校時代につみかさねられてきた戦後五年の学生運動が、いわば総決算のように、ここにあますところなく集約されて、最大の規模で一挙に爆発し、その力のかぎりを表現したのだった。それから新たに出発した今日までの駒場の生活は、よきにつけ悪しきにつけ、このときの遺産であり、あふれでた溶岩ようがんの流れであり、不完全燃焼物である。

いっさいをはらんでいたこの地点から、じつにさまざま問題が出てきて、わかれわかれて今日の学生の諸問題を生みだした。言ってみれば、ぼくはこの五年間を、その問題の糸目のあとを追う光と影のなかですごしてきたようなものだ。そして、今日、また新しい歴史の曲りかどに立って、ふたたび新しい展望のために、大きな深呼吸をしなければならぬときがきたということができるだろう。

ふりかえってみると、七年まえに教養学部が発足した年の九月に、ひと足おくれで、大陸では、中華人民共和国が誕生し、新しい中国の第一歩をふみだしていた。駒場の歩みと思いくらべてみるならば、なんとという巨大な歴史の前進だったろう。

つまり、この新中国の成立を目の前にして、アメリカの占領政策は、急カーヴで日本を反共軍事基地化するサンフランシスコ体制（単独講和）へ移っていった。そのために、それから数年の日本国内は、戦後のうちでも一ばん暗い不安な日々を送らねばならぬことになった。そして、その日々のなかから、新しい大学生活も、駒場の歴史も、あゆみだしていかねばならなかったのだ。ぼくじしん、その当時、そうした情勢をくまなく理解できたわけではなかった。学生たちひとりひとりにしてみても、同じことだったろう。しかし、ぼくもけっして鈍感ではなかったとおもうが、それ以上に、若い学生たちは敏感だった。

かれらはすでにこのときまでに、かれらの理性と情熱を全国的に組織し、一つの強い政治力に結集していた。国家権力が加速度的に弾圧を強化し、かつてない高まりをみせた労働運動を強引に切りくずし、分裂・退潮させたとき、こんどは学生運動がこれにかわって、直接、国家権力にぶつかっていったのだ。「抵抗」^{レジスタンス}という精神が、かれらの理性と情熱を支配していた。

「下山」、「三鷹」、「松川」などの暗い事件は、この教養学部誕生の年に、あいついでおこったのだ。国民の胸は不安でごしごしこすられるようであった。ドッジ・ラインの強行で、インフレは無気味な頭打ちをみせはじめた。

その年の十二月に、南原東大総長がワシントンでの米占領地教育会議で、世界の注目をあびながら「全面講和」の希望をのべた。翌二十五年になると、講和問題は急速に国民の関心をよびは

じめ、そのただなかで吉田首相が南原総長を「曲学阿世」「学者の空論」とののしり、これにたいして、総長は敢然と応酬した。

そのとき、一橋大学の前学長上原専祿教授は、さらにこれを一步進めて、つぎのように論じた。「私じしんは、講和を論じ、平和を説くことを、国民たることの基本的権利と義務の意識においておこなう。新憲法制定の新たなる民族の精神においておこなう。私は歴史学者たるの職分に先ず行するところの、そのゆえに私にとってはより根元的なる、一個の市民たる地位において、それを語っているのである。……」

はたして政府は、《学問の自由》よりも、より根本的なる《国民の自由》を無視しようとするものであろうか。」(朝日評論、昭和二十五年五月二十五日)

この確信は、ぼくの胸にふかくしみとおった。

南原総長渡米のところから、GHQ民間情報部(CIE)教育顧問イールズ博士が、全国の大学を講演して歩き、「赤い教授追放」を示唆していた。学生たちは敏感だった。イールズ声明を、ぼくは、学生の口から、学生の印刷物から教えられた。「曲学阿世」論議と時をおなじくする五月、東北大学と北海道大学で、学生たちは、ついにイールズ博士の講演をボイコットし、東京ではそれにとたえて五千の学生のデモがおこなわれた。

学生の政治意識は最高度に高まっていた。おりから、映画『きけわだつみの声』が封切られ